

その5

梅花の歌

&万葉の花ランキング



和何則能尔 宇米能波奈知流 比佐可多能 阿米欲里由吉能 那何列久流加母

「我が園に 梅の花散る ひさかたの 天(あめ)より雪の 流れ来るかも」

(わが園に 梅の花が散る (ひさかたの) 天から雪が 流れて来るのだろうか)

大伴旅人(巻5・822)

梅花の宴は、天平 2(730)年 1 月、大宰帥大伴旅人邸において、大宰府の要人や九州各国の国守、国司等 32 人が集まり、梅花を愛で詠う優雅な宴が催された。後に「筑紫歌壇」と称せられる風流を解する面々が揃い、文学史上名高い歌宴となった。万葉集の第 5 巻には全員の歌 32 首が記録されているが、ここに掲げた歌は、最初の宴席の賓客 7 人の歌の後、宴のホスト(主人)である大伴旅人が詠んだ歌である。流れるように舞い落ちる梅の花の映像が目に見えるかのように美しい歌だ。

その前の 7 人の賓客の中には、その名を知らぬ人はいない万葉を代表する歌人、当時筑前守だった山上憶良(やまのうえのおくら)がいた。その憶良の歌。

「春されば まづ咲くやどの 梅の花 ひとり見つつや 春日暮らさむ」

(春になると まず咲く家の 梅の花を ひとり見ながら 春の日を暮すことか)

山上憶良(巻5・818)

そして他に、その歌を知らぬ人がいないほどに有名な歌、「あをによし 奈良の都は 咲く花の にほふがごとく 今盛りなり」(巻3・328)を詠んだ大宰少弐(だざいのしょうに)小野老(おののおゆ)の歌。

「梅の花 今咲けるごと 散り過ぎず 我が家(へ)の園に ありこせぬかも」

(梅の花よ 今咲いているように 散ってしまわずに わが家の園に 残っておくれ)

小野老(巻5・816)

この大宰少弐小野老は、後に昇進し大宰大弐となるが、先に書いたように、その後鬼病に感染し亡くなったとされている。万葉集には、大宰府在任中の3首が残された。

大陸との窓口となった太宰府は、いろいろな物や人とともに鬼病も入ってきて、そこから大和の国全域に広がり大流行した。梅もその例にもれず、当時は中国舶来のまだ貴重な植物で、まずは大宰府の高官の館に始まり、その後奈良の都など主に貴族の家の庭に広がった。従って、梅の花の歌は、貴族に好んで詠われたのである。



大宰府政庁跡

ところで、大伴旅人の2人の息子、家持と書持（ふみもち）は、父に同行して大宰府に来ていた。この梅花の宴が催された時は、家持は13歳、書持は9～10歳だったが、2人とも、幼いながらも、この宴に立ち会っているか、歌会を目撃している。なぜなら、2人ともによほどこの歌会が印象深かったのだろう、成年になってから、「大宰の時の梅花に追和する」、或いは「春苑梅歌(しゅんえんばいか)に追和する」歌を詠んでいる。書持は10年後、21歳の頃に6首（巻17・3901～3906）、家持は20年後、33歳の時1首（巻19・4173）を詠んでいる。また、大宰府にわたってすぐ旅人の妻大伴郎女が病死するが、その後家刀自として代わりに大宰府の館にやってきたのが、旅人の異母妹で、前回太宰治が愛する人に贈った「常人の」の歌を詠んだ大伴坂上郎女だった。その坂上郎女も、梅花の宴に追和したと思われる歌1首（巻8・1656）を残している。とすると、大宰府の梅花の宴の関連で、実に梅花の歌が合わせて40首も詠まれたことになる。万葉集中梅を詠った歌は119首だから、その3分の1を占めている。もし、この宴がなかったとしたら、梅の歌は一気に70首台になってしまうことになる。

万葉集には、多くの植物を読み込んだ歌が詠まれており、全4516首の内、その3分の1を越える1700余首を占めている。では、万葉集で一番多く詠われている花は何か？そして、梅の順位は？

万葉の花ランキングのベスト10は、次のようになる。敢えて、梅については、梅花の宴の歌を外した79

首でランキングして見ると……

- ① 萩 142 首 ② 梅 79 首 ③ ヒオウギ 79 首 ④ 松 77 首 ⑤ 橘 69 首
⑥ すげ 49 首 ⑦ 葦 49 首 ⑧ 桜 46 首 ⑨ ススキ 44 首 ⑩ 柳 36 首

となっている。ランキングとは別に、万葉の花と言うと、山上憶良のこの歌を取り上げなければなるまい。

「指を折りながら数えてみると」と、秋の花の代表萩の花から詠い始める「秋の七草」の歌である。

「萩の花 尾花葛花 なでしこが花 をみなへし また藤袴 朝顔が花」 山上憶良(巻 8・1538)



それに対して、現代ナウ、今の日本人が好きな花ベスト 10 はどうか？ 調査によって異なるが、その 1 例を見てみよう。2007 年に、全国 3600 人を対象に行った NHK 世論調査である（数字は％）。

- ① 桜 66 ② チューリップ 44 ③ ばら 43 ④ コスモス 37 ⑤ ひまわり 34
⑥ 梅 33 ⑦ らん 32 ⑧ すずらん 32 ⑨ ゆり 32 ⑩ あじさい 30

現代ランキング 1 位の桜は、「日本人の桜好き」から言って、ほとんどのランキングが首位に上げているが、万葉ランキングでは第 8 位。現代第 2 位のチューリップは江戸時代に日本に入ってきたが普及に至らず、大正になってから球根栽培が始まったというから、当然万葉集中チューリップの歌はない。もし、万葉の時代にあったとして、梅花の宴に列席した大伴旅人を筆頭に山上憶良、小野老など筑紫歌壇 32 人の面々がチューリップの歌を詠んだとしたら、色とりどり 32 首の華麗なチューリップの歌が咲き誇ったことだろう。現代第 3 位のバラは、紀元前 12 世紀ごろには、すでに古代ペルシャで栽培されていたといわれ、シーザーの死後アントニウスをエジプトに招き入れたクレオパトラが、大理石の床にバラの花弁を 70 センチも積もらせて迎えた逸話が喧伝されるように、有史以来人類にもっともなじみ深い植物の 1 つとされている。

では、万葉集ではどうか？ 1 首だけ、上総国の防人が「うまら」と詠んだバラ、野いばらの歌がある。

「道の辺(へ)の 茨(うまら)の末(うれ)に 延(は)ほ豆の からまる君を はかれか行かむ」

(道ばたの 茨の先に 這いまつわる豆の蔓のように まつわりつくあなたと 別れて行くことか)

上丁文部鳥(はせつかべのとり)(巻 20・4352)

平安時代になると、バラは、あの難しい「薔薇」という漢字で書いて、「そうび」と詠われるようになり、『古今和歌集』や『源氏物語』にも散見される。『源氏』では、不遇な時期の光源氏を招いて「薔薇(さうび)、けしきばかり咲きて、春秋の花盛りよりもしめやかにをかしきほどなるに、うちとけ遊びたまふ」とあるのは、「賢木」の巻である。



ここで特記すべきは、万葉ランキング第1位の「萩」である。ぶっちぎりの1位だから、万葉びとに最も愛された花と言っても間違いではない。しかし、現代ランキングを見ると、NHK世論調査の20位まではもちろん、他の各種調査やアンケートにもその名を見ることができない。現代人は見向きもしないのに、なぜ万葉びとはこれほどに萩の花を愛したのか。万葉びとが好きな秋のシンボルというべき花だからという説が有力のようだ。実りの秋豊かに咲きこぼれる豊穰の象徴だからとか、性的な象徴だからという人もいる。花見というと現代は桜ということになるが、万葉の時代は、一般庶民が「萩のあそび」と呼んだ萩の花見と大宰府の梅花の宴のような上流階級の梅の花見の2つとされている。

そもそも東京あたりに住んでいると、萩の花を見る機会はほとんどない。たまに奈良に出向いた時など、意識して萩の花を探しては、これが万葉で一番人気の萩の花か、それにしては慎まじやかな花だなあ、という程度で、豊穰の象徴とされる豊かに咲き誇る萩の花などお目にかかる機会など全くないこともあり、万葉びとの心境に至るのはなかなか難しい。従って、万葉集の萩の歌をいくつか読んでも、万葉びとが愛した理由やその自然観がなかなか理解できない。いずれにしても、先に「何より、万葉集には、人を愛し、身近な草花を愛で、豊かな自然や四季を愛おしむ日本人の原像が詠み込まれている」と書いた。万葉人と現代人が愛でる花の種類は変わっても、人は花を愛で、愛しみ、愛し、それを歌や詩に詠んできた。古来疫病や鬼病に苦しんできた人々も、花や自然を愛で歌に詠むことで癒され慰められてきたことだろう。新型コロナの時代も同じだ。私たちは、草花には三密を避けたり、ソーシャル・ディスタンスをとる必要がないのだから、万葉びとに倣い、もっと花に親しみ自然に還ることが必要なのかもしれない。

ところで、万葉の花ランキングを見るたびに、長年分らなかったことが 1 つある。現代人は、花を見る時、その周りを飛ぶ蝶の姿をともにいつくしむことが多い。「花と蝶」とセットで言われるように、まぎれもなく切っても切れない、いわばパートナーと言ってもいいほどだ。ところが、万葉集には、蝶の歌がないのである。

ところが、ところが、である。新元号の典拠となった万葉集の巻 5 の梅花の宴の「序」の「令和」のすぐ後に、蝶が登場する。梅の花が散る庭の描写のところで、「庭には舞う新蝶（しんてふ）あり」とある。他に、大伴家持が桜を詠った歌（巻 17・3967）の序にも、「戯蝶（ぎてふ）は花を回りて」とある。だから、間違いなく、万葉の時代も、花の周りを蝶が舞っていたのである。それなのに、花や植物の歌は万葉集の内約 1700 首も占めているというのに、蝶を詠った歌は 1 首もないのは、なぜか？ ネットを見ると、令和が万葉秀歌から引用され、梅花の宴の序が注目されたことから、そこに「蝶」が舞っていながら、歌はないことが関心を集め、いくつか同じ疑問が提起されていた。中には、図書館振興財団主催の「調べる学習コンクール」で優秀賞を受賞した論文「新元号『令和』の典拠『万葉集』～なぜ万葉集には蝶の歌がないのか」などの例もある。それによると、蝶は「不気味な存在」であり、「不吉な存在」だったからではという。蝶はもともとは毛虫で、蝶に似た「蛾」を見るような気分だったのだろうか。しかし、歌ではなくとも、2 首の歌の序に、それも美しい情景を描いた序に、「不気味な存在」や「蛾」を舞わせるものだろうか。どうにも腑に落ちない。

かくのごとく、「萩」や「蝶」に対する万葉びとの美的感覚を理解できないのは、太宰の「失点」に続いて、宣伝係「失格」である。しかし、下の写真のように見事に咲き誇る萩の花に遭遇し、万葉びとのように、「萩のあそび」を一度でもしたら、私の見方は変わっていたかもしれない。とはいうものの、やはり万葉びとは萩の花の慎ましやかさを愛でたのでは、と思い直したり、いや、その二面性を愛したに違いない、と思ったり、そう、豊潤と慎ましさの二面性、それは花にとどまらず豊饒と質素、さらには豊満と清淑（それは後の男女の話につながるが）というバイラテラルなナウな見方にもつながるのでは、など等、わが想念や雑念もまた千々に咲き乱れるのである。

